新　聞　　毎日新聞　2018年2月27日(火)　夕刊　学生7　　〔第3種郵便物認可〕

イスラムの多様性 知って

ハラール認証 見直すなら今

後藤東大准教授 チョコ包装で問題提起

東京五輪・パラリンピックを2020年に控え、イスラム圏からの訪日外国人増加も見込んでハラール認証への注目が高まっている。そんなハラール認証について一度立ち止まって考えてみることを提案するのが、東京大学が販売する「ハナーンチョコレート」だ。プロジェクトに関わる東京大学東洋文化研究所准教授の後藤絵美さんに話を聞いた。　【一橋大・川平明花、写真も】

「ハナーン」はアラビア語で「思いやり」を意味する。ムスリム(イスラム教徒)でも安心して手に取れるようにと、ハラール認証を受けたチョコレートだ。しかし、それだけのチョコレートではない。認証に関する問題や解決策について考えることを促したい、そんな思いから生まれたものだ。

パッケージの裏面には日本語と英語でハラールの説明が。そして「ムスリムがハラールじゃないものを食べたらどうなるの?」など、考えてほしい事項が並ぶ。後藤さんは「(ムスリムにとって)ハラール認証がもたらす安心感も大切。ただ、厳しい基準によって、神が禁じていないものまで食べられなくなる状況は、考え直す必要がある」と話す。

後藤さんの専門は、現代イスラム研究。特にイスラムの理解や、実践における多様性や可変性について研究している。後藤さんの周りには、ハラール認証を気にしないムスリムが多かったという。そのため、ここ10年の広まりには驚いているそうだ。

そもそもハラール認証とはどのようなシステムなのだろうか。イスラムの教えでは、豚などは「ハラーム(禁じられたもの)」とされ、食べることができない。ムスリムの国で流通する商品の大多数は、ほとんどがハラールだ。しかし非イスラム圏では、見た目では分からないがハラームの成分が入っていることもありうる。そのため、安心して食事できないというムスリムも多い。そんなとき、国や専門家がいる機関のハラール認証が役立つ。日本でも、NPO法人日本ハラール協会や宗教法人日本ムスリム協会などが、認証を行っている。

メリットしかないように見えるハラール認証。しかし厳しい基準を設定し、ハラールを明文化する認証に対して、後藤さんは警鐘を鳴らす。具体的には、認証がもたらす二つの分断を指摘する。

一つはムスリム同士の分断だ。後藤さんによると「イスラムでは神と自分の関係が大事。本来他人のやることには寛容でした」。何をハラールとするかは、個人の判断も大きかったという。しかし厳格な基準のハラール認証が広まることで、ハラールに対する解釈の余地がなくなってしまう。その結果、他の基準で生活するムスリムと対立する危険性があるのだ。

もう一つはムスリムと非ムスリムの分断。ハラール認証が明文化した「あるべきムスリムの姿」だけが広まると、ムスリムに対する決めつけが強まってしまうかもしれないという。たとえばムスリムは全員酒を飲まないと思っていないだろうか。実は、信仰の仕方によっては、ムスリムでも酒を飲む人はいる。「イスラムに詳しくない人にこそ、チョコレートを機会に考えてほしい」と後藤さんは話す。

では、ハラール認証の問題に解決策はあるのだろうか。後藤さんは例として「成分の多言語表示」を挙げる。成分が分かれば、認証マークがついているからという理由ではなく、自身で判断して商品を購入することが可能だ。

ハラール認証が制度化されたのは1970年代と、比較的新しい。年配のムスリムを中心に、ハラール認証にこだわらない人も多いという。しかし今の子どもたちは、生まれたときから認証があるため、その影響は拡大し続けるだろう。「見直すなら今」と後藤さんは訴える。

今まではハラール認証の利便性のみに目がいっていた記者。その問題を提起するチョコレートを食べつつ、思いやりとは何かについて考えたい。

ハナーンチョコレートは同大本郷キャンパスのコミュニケーションセンター、IMTブティック(東京都千代田区)、東京大学コミュニケーションセンターオンラインストアで購入可能。価格は1080円。

ハナーンチョコレートの普及を通してハラール認証の課題について提案する、後藤絵美さん

「ハラール認証」

イスラムの教えで禁じられた豚肉などの食材や成分が入っておらず、「ハラール(許されたもの)」であることの認証。1970年代にマレーシアで始まり、現在は世界に200以上の認証機関がある。